２０１９年１０月２７日　説教『人間が創造された理由』　高橋克樹牧師

創世記１章１～５節、２４～３１節ａ、コロサイ書１章１５～２０節

創世記の最初の言葉は「初めに」（ベレシート）です。このベレシートというヘブル語には時間の「初め」という意味に加えて「根拠」という意味があります。創世記１章の著者（祭司資料記者）は、神によって創造された世界の存立「根拠」を創世記によって示そうとしたのです。それは当時のイスラエル民族が直面していたバビロン捕囚という現実が理不尽で矛盾に満ち、混沌とした状況だったからです。

彼らには生きている世界が暗闇に映っていたのです。そのことが『地は混沌（カオス）であって、闇が深淵の面にあり』（２節）と表現されているのです。この民族の苦難の意味を解明すべく、捕囚の現実の背後でどのような神の意思があったのかを描こうとしているのです。このような混沌と闇の中にある世界に対して、神はまず『光あれ』という「言葉」によって漆黒の闇に光がもたらし、被造世界を創造したのです。

しかもこの神の「言葉」は混沌とした世界を秩序立てて、創造していきます。さらには捕囚という苦難や暗黒の中を生きていくための希望を神がどのように用意しておられるかを考えたのです。こうして神の「言葉」が人間を生かし支える根拠であり根源的な力であることに気づいたのです。

紀元前６世紀にバビロン捕囚という苦難を経験した祭司資料記者はそのように考えて、この１章の創造物語を書いたのです。バビロン捕囚とはバビロニアによって侵略されたユダ王国の指導者たち１万人強がバビロンの地に捕囚民として強制連行された歴史的悲劇です。イスラエル人は奴隷状態に陥り、自由な意志と行動を奪われました。

やっと５０年以上たってバビロニアが滅び、捕囚当時の指導者たちの子孫らがエルサレムに帰ることができるようになったのですが、長い不在期間の間にエルサレムには別の住民たちが住みつき、エルサレム神殿の再建は困難を極めました。帰還するにしても残留するにしても生きる根拠が必要だったのです。

このようにユダヤ人たちは信仰共同体として生きる希望を見いだそうとして、無力で非力な中で自分たちの存在根拠を確立しようとしたのです。神殿が破壊され、国が亡びて捕囚という憂き目に

遭ったユダヤ人たちの多くは、神ヤハウェが無力で無能な方なのではないかという深刻な疑いを抱いていたからです。

また、ヤハウェが創造した世界は果たして人間に対して善良でありつづけるのか。この問いは現代の私たちも直面するものです。神は人間を無意味に理不尽に苦しめてはいないか。これらの疑いが創造物語を書く大きな動機だったのです。当時の世界帝国であるバビロニアは物質中心主義の経済大国であり軍事国家でした。

イスラエルの民は、バビロニアの最高神マルドゥクが強力な経済力と軍事力をもって諸民族を支配しているのを見て、神ヤハウェはどういうお方であるのかを真剣に考えたのです。イスラエルが亡国したことは、その神ヤハウェがバビロニアの神に敗れた証拠です。それはイスラエルの民が信じていた神ヤハウェは弱い存在だということです。

当然、イスラエルの民がバビロン捕囚という苦難の中にあったとき、神は何をしていたのかという疑問が提出されました。無力な神ヤハウェは何をもってこの歴史的悲劇に関わり、今後どのようにイスラエルの民を導くのか？　バビロン捕囚に耐えてヤハウェを信じて生きていくためには、この問いに対する答えが必要でした。

これに対して、著者はバビロン捕囚という混沌として闇の世界に生きているイスラエルの民に、神は「言葉」によって光をもたらし、この世的な力によらない「言葉」で世界を創造すると言うのです。この神の「言葉」の力が9回にも及ぶ『神は言われた』（ベヨメル・エロヒーム）という言い回しで繰り返されています（3節、6節、9節、１１節、１４節、２０節、２４節、２６節、２９節）。しかも、「神はこれを見て、良しとされた」という言葉が6回も出てきます（４節、１０節、１２節、１８節、２１節、３１節）。３１節では遂に『極めて良かった』と自己評価は最高潮に達します。

自分の「言葉」によって創造した世界を見て、当の創造主である神御自身が自らの被造世界を肯定するのです。しかも、肯定するだけでなく祝福をするのです（２２節、２８節、２章3節）。世界も人間も、世界に存在するすべてのものが、神からその存在を肯定され祝福されているのです。

そこに被造世界と人間に対する神の基本姿勢が示されているのです。『祝福』（ベラーカー）とは、神がどのような状況にあっても人間を肯定し受容する神の恵みを表しているからです。

今から２６０年前の１７５５年１１月１日にポルトガルのリスボンで推定Ｍ８・７の地震が起き、６万人が死亡しました。当時のリスボンの人口が２７万人ですから、２０％の人が亡くなったのです。理性の世紀といわれた１８世紀中葉は、世界は完全で善良であり、人間の理性の象徴である哲学が非常に盛んになった時期です。

エチカで有名なライプニッツなどもこの時代の基礎を作った人物ですし、スピノザも同じくこの時代の代表的な人物です。しかし、１１月１日は諸聖徒の日でした。神に祝された日にそのような災害が起こったことに１８世紀の知識人たちは大きく動揺しました。一番困ったのは神学者です。神学的に誰もが説明できません。なぜ、神に命を賭けて仕えた聖人を祝おうとする日に神の罰を受けなければならないのか！

そこでヴォルテールなどの啓蒙思想家たちは、神は善であり、慈悲深く、世界に対して最善で最良の意志を実現しているはずだという考え方を痛烈に批判しました。彼だけでなくこの時代の多くの人間が最善をもたらすはずである神という存在が信じられなくなったのです。

文豪ゲーテもこの地震の時に６歳で、神の摂理や理性、神の善性が信じられなくなったと回顧しています。ゲーテは、神は人間の苦難のときに、いったい何をしているのか。自然の災害に対して何もできないのかと子どもながらに考えたといいます。ただ、このように考えてしまうのは現代人である私たちも全く同じです。

悲惨な戦争が起こったり、理不尽で矛盾した出来事に突然襲われたり、自然災害や大地震があるたびに繰り返し神の存在が疑われ、神の無力さが問題になってきました。私たち信仰者も、この問いにうまく答えられないところがあります。

このリスボン大地震のことが出てくる小説「カンディード」（岩波文庫）は、当時の啓蒙主義者ヴォルテールが書いたものです。神は決して善意をもって世界を創造したのではないと唱えた彼の思想を反映しています。物語はこうです。主人公はドイツのある領主の甥にあたるカンディードという若者です。

哲学者でもある家庭教師パングロスが教えた「この最善の可能世界においては、一切の事柄は善である」というライプニッツの世界観を信じて育ったカンディードが、領主の娘キュネゴンドと接吻をしたために、城から追放されてしまいます。

その後カンディードはさまざまな苦難に出遭います。人を疑う事など知らなかった彼は、神が善良で正しい摂理で人間を導くと信じ切っていました。しかし、現実世界で理不尽な悲惨な出来事に次々と出遭い、梅毒を病み路上生活者になりました。さらには個人的な苦難だけでなく、戦争、虐殺を目撃し、地震にも遭遇して異端審問にもかけられます。

この異端審問からは幸い逃れることができるのですが、人生の終盤で彼はわずかな土地を手に入れます。そのとき出会った老人が「労働は私たちから3つの大きな不幸、つまり退屈と不品行と貧乏を遠ざけてくれる」という話を聞いて、それまで心酔していたパングロスの言葉を最終的に切り捨てて、「自分で庭（土地）を耕さなければならない」と独自の判断を下すのです。

つまり、神に委ねて生きていくのではなく、自分の自由意志を優先させた生き方へと大きく方向転換したのです。この物語には神の摂理に委ねる生き方が後退し、人間が自由意志と自力でよりよい世界を創造する主体的な存在になるのだというヴォルテールの主張が表されています。

「根拠」という語はドイツ語ではグルント（理性、土台の意）、英語ではグラウンド（大地、土地の意）です。いずれも足を踏ん張る大地や土台があって、初めて人間は生きる根拠を得るし、理性が働いて生きる理由も見つかるということを前提にした言葉です。ところが、リスボン大地震でこの根拠が失われたと啓蒙主義者ばかりでなく一般人の多くが考えたのです。

さて、バビロン捕囚を経験したユダヤ人はエルサレムに帰還しても住むべき土地がない絶望的な状況の中で、神に立脚した人間の生きる根拠を求めました。だから、創世記の冒頭で神は人間が生きる天地をどのような意図で創造されたかの「根拠」をまず「最初に」考えたわけです。バビロン捕囚を経験したイスラエルの民たちは、この生きるための「根拠」を創造物語に登場する人間を「神の似姿」として表現しました。

『我々（＝神）にかたどり、我々（＝神）に似せて、人を造ろう』（26節）の『我々にかたどり』の直訳は「我々（＝神）の像に」似せて創造したのです。人間は神のイメージに似せて創造されたことがここで宣言されています。また、『我々に似せて』の直訳は「我々の模造のように」で、神の似姿として人間が創造されたことを示しています。これは神が創造した世界の中で、人間は神の存在の生き写しとして、また神の意志をこの世で体現する者として、さらには神と本質的に似た者として創造されているという宣言でもあるのです。

ただ、このことは不可思議な思いを抱かせます。私たちは弱さや欠けがあることを自分自身で知っていますから、自分が全知全能の神の似姿のような存在だとはとても思えない。しかし、逆にみれば、神は人間という弱さ、欠けのある者を御自分の似姿として創造することで、不完全なままで尊厳ある者とされたということです。

そして、1章27節で『神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された』と語っているように、創造された世界秩序の中に、人間を被造物として位置づけられています。さらに28節で『神は彼ら（人間）を祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物を統べて支配せよ」』と語り、被造世界をケアする使命を人間に与えられるのです。

「支配する」（ラーダー）という動詞は、王による統治を意味する語ですが、貧しい人や乏しい人たちを「世話し養う」という意味もあります。神にかたどって創造された人間は、他の被造物をバビロニアのように力で支配するのではなく、ケアする使命が与えられているのです。

しかも注目すべきは、ここで語られている人間創造は人間一般のことであって、バビロニア人やアッシリア人、エジプト人、イスラエル人という優劣の区別がないのです。すべて人間は平等に神ヤハウェによって創造された被造物であるという宣言です。

捕囚地において奴隷以下に見なされていたイスラエルの民にとって、この主張は大きな意味をもっていました。バビロニア人でなければ人間にあらずという風潮の中で、支配する側の人間、支配される側の人間の分け隔てがなく、すべての人種・民族を相対化しているからです。

イスラエル人も自国民だけを特別扱いしていません。イスラエルの神ヤハウェは人間を平等に処遇するのです。このような創造物語を通して、神がすべての人間のために天地を創造し、平等に恵みを与えてくれたことを主張しているのです。

神ヤハウェが平等に恵みを与えるということは、当時の支配的な物語であるバビロニアの創造物語とは正反対の理解です。イスラエルの民を捕囚したバビロニアの神話によると、人間は主神マルドゥクに殺された男神キングの血と土を混ぜて造られます。

その目的は神々が担うべき労役の苦しさの役割を人間に押し付けるためでした、それによって神々は労役の重荷から解放されるからです。人間が神の労役の肩代わりをするのです。神に隷属す

5

る奴隷として人間は創造されたというのがバビロニアの創造物語です。

これに対して、聖書の天地創造物語では、魚、鳥、家畜、野獣、爬虫類など生物すべてをケアするために、神は人間を創造したのです。人間に委託した事柄の根本が全く異なっています。

自分が担うべき責任を人間に転嫁させる神がバビロニアの神です。一方、イスラエルの神ヤハウェはこの世的には支配され弱さの中にあるかもしれないけれども、他者を配慮することを通して他者と真摯に出会って、その人間を自由な意思を持った対等な人格として処遇するのです。

特定の民族や国家を栄光ある存在にするために神がその御業をなすのではありません。すべての被造物が神の祝福を受けて命ある存在を肯定しているのです。

現実世界で人間は苦難に出会います。苦難に直面しない人生はありません。しかし、人間が苦労して生きることは、神の祝福がなければ生きられない存在であることを学ぶ機会でもあるのです。神は私たちを肯定し、祝福する。そのことがノアの洪水物語でも、アブラハムの物語でも繰り返し描かれています。肯定することから神は被造物との関係を出発させる。

にもかかわらず、私たちは神に対して肯定的にかかわることから出発しているでしょうか。まして、自分が出会う人々を祝福することから関係性を始めているでしょうか。そのような恵みに満ちた問いの前に立たされているのです。